

玉鬘の初瀬詣——流離と再生の感覚

毛利香奈子

一、はじめに——玉鬘と物詣

『源氏物語』玉鬘巻で筑紫から上京した玉鬘は、九条に滞在しながら、石清水八幡宮と長谷寺に参詣している。石清水八幡宮については、筑紫で「多くの願立て」（玉鬘巻——一〇三）をし、無事に上京できたことに対する願ほどきのための参詣だったと考えられる。それに対して長谷寺は、再び願立てのための物詣であると考えられるのだが、初瀬参詣によって誰のどんな願いが叶ったかは、先行研究でも意見が分かれている。

たとえば山田利博氏⁽¹⁾は、玉鬘が、初瀬の靈験が示現する説話が多い「九条」に住んでいたことを重視し、「玉鬘が初瀬観音に庇護されて一応の幸福を得た」としている。一方、初瀬で玉鬘と再会をはたした、右近の願いが叶ったとする論考もある。坂本共展氏⁽²⁾は、初瀬での祈願の内容について、玉鬘は「父大臣との再会と自身の幸福な人生」を、右近は「玉鬘が源氏に迎えられ幸福になること」を願ったのだと整理している。これを踏まえて、陣野英則氏⁽³⁾は、玉

「鬘の願いがすぐに叶わないことに注目し、「ここでの靈験は右近の身の上であらわれたとみるべきであろう」としている。初瀨での玉鬘と右近の再会が、それまで右近が願立ってきたことの結果であることを重くとらえるのであれば、後者だと考えるべきであろうか。いずれにしても、玉鬘の六条院参入に初瀨参詣が不可欠であったことは間違いない。それを靈験譚の枠組みから読み解くことも重要だが、願かけの対象である玉鬘自身が初瀨に赴き、物詣したことにについても、もう少し重視する必要があるのではないだろうか。

平安時代の女性の物詣については、木幡かほる氏⁽⁴⁾、岡崎知子氏⁽⁵⁾、原田敦子氏⁽⁶⁾の論究がある。岡崎氏は物詣の「社会性」に注目し、以下のように論じている。

物詣は、方違えなどと共に、外出の機会の少ないこのころの女性たちにとって、自然鑑賞のよい機会であり、また狭隘な後宮や閨房の生活からより広い社会に接する窓でもあった。平生家の中に閉じ籠りがちな彼女たちは、広い外界の自然に自らを解放し、いつもとは違った環境の中に自己を置くことによって、そこに一種の気分転換と自我の解放とを試みるのは楽しいことであった。

(二二二)

原田敦子氏は「物詣の旅は、精神的にも肉体的にも経済的にも、多大のエネルギーを要した。そのことが逆に物詣の高揚感を増したと考えられないであろうか」とする。岡崎氏の考察につながる指摘であり、物詣は靈験の有無にかかわらず、女性の日常に変化をもたらすイベントであったといえるだろう。そうだとすれば、徒歩で初瀨へ参詣した玉鬘にも、心身になんらかの変化があったはずである。そしてそれは、その後の彼女の生き方が大きく変化していくことと、無関係ではないと思われる。

本稿では、靈験とは少し距離を置き、物詣の旅という経験が玉鬘にどのように影響したのかを、今一度捉え直すことを試みたい。特に注目したいのは、玉鬘が行った二回の物詣のうち、彼女自身が徒歩で向かい、なおかつ記事も長い、初瀬参詣である。以下、玉鬘の心身の変化に注目しつつ玉鬘巻前半を考察していく。

二、徒歩での参詣—疲労と、流離の実感

玉鬘巻の初瀬参詣の記事を読み進めると、玉鬘の身体感覚についての叙述が増えていることに気が付く。石清水参詣には同様の叙述は見られない。

また、物詣の旅以前にも、玉鬘は筑紫からの危険な舟旅を経験している。旅の期間や危険性から考えても、初瀬参詣より筑紫からの道中の方が、刺激は多かっただろう。紫式部自身も、父の越前赴任に帯同し、舟旅を経験している。琵琶湖を舟で移動するときの歌が、『紫式部集』に所収されている。

夕立しぬべしとて、空の曇りてひらめくに

かき曇り夕立つ波の荒ければ浮きたる舟ぞ静心なき

〔紫式部集〕一二二番歌—二〇九

舟の揺れと不安な心とを重ねた表現は、『源氏物語』浮舟巻にもみられる。勾宮と共に、舟で対岸の小屋へと向かう浮舟の詠歌である。

橘の小島の色はかはらしをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ

（浮舟巻——一五一）

このように、女性の不安を舟と共に表現した紫式部であれば、玉鬘の場合でも、舟旅における彼女の心情を、より多くの紙幅を割いて描きこんだように思われる。ところが本文中にあらわれるのは、海賊よりも大夫監が恐ろしいと感じたり、「いとあとはかなき心地して、うつぶし臥したまへり」（玉鬘巻——一〇〇）という行動に出でいたり、という程度である。旅の規模から考えれば、玉鬘が経験し、感じ取ったことについての叙述が少なくと言わざるを得ない。それに対し、初瀬参詣の往路では、玉鬘の身体感覚と連動して、心の変化についても多く触れられている。以下、本文を引用し、重要な箇所傍線を引いた。

ことさら徒歩よりと定めたり。ならばぬ心地にとわびしく苦しけれど、人の言ふままにもおぼえて歩みたまふ。「いかなる罪深き身にて、かかる世にさすらふらむ。我が親世に亡くなりたまへりとも、我をあはれと思さば、おはすらむ所にさそひたまへ。もし世におはせば御顔見せたまへ」と仏を念じつつ、ありけむさまをだにおぼえねば、ただ親おはせましかばとばかりの悲しさを嘆きわたりたまへるに、かくさし当たりて、身のわりなきまに、とり返しのみじくおぼえつつ、からうじて椿市といふ所に、四日といふ巳の刻ばかりに、生ける心地もせで行き着きたまへり。歩むともなく、とかくつくろひたれど、足の裏動かれずわびしければ、せん方なくて休みたまふ。

傍線部からわかるのは、徒歩での参詣の苦しさ、その疲労の中で玉鬘の感情が動いているということである。現在の京都市から長谷寺も、約七〇kmの距離があり、初瀬詣に慣れた右近であっても、京から長谷寺まで二日間かかっているとの指摘もある。⁽⁷⁾ 岡崎知子氏は、貴族の女性にとって困難な徒歩詣をするのは、「骨を折って詣でることが功德になると考えられていたから」だとする。玉鬘の場合も、九条での不如意な生活を打開するために、より功德を高められる徒歩が選ばれたのであろう。

困難な徒歩詣の様子がよくわかるのは、『蜻蛉日記』の石山詣の記事である。以下に一部を引用する。

やり過ごして、いまは立ちてゆけば、関うち越えて、打出の浜に死にかへりていたりたれば、先立ちたりし人、舟に菰屋形引きてまうけたり。ものもおぼえずはひ乗れたれば、はるばるとさし出だしてゆく。いとこち、いとわびしくも苦しいも、いみじうもの悲しう思ふこと、類なし。申の終はりばかりに、寺の中につきぬ。齋屋に物など敷きたりければ、行きて臥しぬ。こちせむかた知らず苦しきままに、臥しまろびぞ泣かるる。

『蜻蛉日記』中巻一〇六

途中で舟にも乗っているが、傍線部からはいかに徒歩の旅が過酷であったかがわかる。石山寺よりもさらに遠い長谷寺に徒歩で詣でた玉鬘の疲労は、もっと重いものであっただろう。

『蜻蛉日記』の前掲引用部分の前後では、道綱母が観察した自然や人々の描写が続く。「ただ走りてゆきもてゆく」

（中巻―二〇四）「からうして行き過ぎて」（中巻―二〇五）と、かなり急いで移動していたにもかかわらず、「いみじくののしる者」「馬に乗りたる者あまた」（中巻―二〇五）など、すれ違う人々への印象は、こまかな観察をもとに具體的に語られている。それに比べて玉鬘巻の初瀬参詣は、樅市に到着してからも、観察をもとにした自然や人々の描写が少ない。前提として、日記文学と物語文学の違いを考慮しなければならないが、それでも少ないといっている部分である。つまり、徒歩で旅している玉鬘が、何かを観察し、それによって心境が変化した様子は読み取れないのである。あまりの疲労によって、周囲を見渡す余裕がなかったといえるかもしれないが、そもそも玉鬘の関心が周囲に向いていないために、心が動かなかった可能性もある。なぜなら、前述したように、肉体の疲労を実感したことによる心の動きは、本文中に示されているからである。

特に、玉鬘巻の前掲引用本文の二重傍線部にある、「さすらふ」身であることを実感している箇所について考察を加えたい。これは、おぼつかない足取りでふらふらと歩く肉体の感覚と連動したものである。前述したように、浮舟巻において、舟に揺られる浮舟は「ゆくへ知られぬ」（浮舟巻―一五一）という不安を抱いていた。玉鬘は徒歩によって同様の不安を覚えたことになるが、揺れの規模が小さいようににも思われる。たしかに舟は大きく揺れる乗り物ではあるが、ダイレクトな刺激という意味では、自らの足で歩く行為の方が強くその身に感じられたのだろう。

徒歩によって蓄積した疲労は、玉鬘の中の「生ける心地もせで」という感覚を引きだし、それは「我が親世に亡くなりたまへりとも、我をあはれと思さば、おはすらむ所にさそひたまへ」（点線部）という心境に重なってくる。徒歩詣の疲労は、功德の前に、まず玉鬘に流離の身であることの実感をもたらした。そして、単なる喩ではない、彼女にとっては今まで生きてきた中で最も「死」に近い感覚を抱かせた。どちらも玉鬘にとって、大きな変化だったと

いいだろう。尋常ならざる疲労が蓄積した流離の身は、椿市からさらに山道を登り、御堂へと歩を進めることになる。極限状態の心身は、夜の御堂の暗闇の中で、どんな変化にさらされていくのだろうか。

三、母胎からの再生——「恥」の自覚

夕暮れに椿市を出発した玉鬘一行は、石段を登り、本堂へと向かう。夜の間は局にて、「おどろおどろしき行ひの紛れ、騒がしきにもよほされて、仏拝みたてまつる」(玉鬘巻——一一)。そして、夜明けと共に御堂を出て、「坊下りぬ」(玉鬘巻——一二)——この行程を三日繰り返したことになる。この、山の上の御堂に籠ることについては、先行研究でもさまざまに論じられているが、「再生」がひとつのキーワードになるであろう。

西郷信綱氏は長谷寺について「こもりくの泊瀬」のコモリクも、籠り奥まった初瀬の景観に帰するだけでは皮相で、神話的にはそれは豊穡の源たる母胎を意味したはずなのである。そして実は、母胎に擬せられるこのようなところこそ、観音が示現するにもっともふさわしい地であったといわねばならぬ」と述べている。さらに、その母胎たる籠りの空間に入り、出てくることについては、以下のように論じている。

だから夢を得るとともに参籠は終り、人々は下山し、物忌みを解き、ふたたび俗界にもどるのである。しかし、ただだんに俗界にもどるのではなく、それは一種のよみがえり、再生としての還俗にほかならない。すでに何度もいったとおり、「こもりく」初瀬は母胎で、したがってその御堂に「こもる」のは死んであらたに生まれ変わって来るためであり、現に人々はおのがじしの運命の未来を夢の告げのなかに授かるのであった。(一一〇〇)

夜の間籠っていた母胎から、夜明けとともに山道（産道）を通過して下山するという動きは、確かに人の誕生と重なるものである。それは西郷氏がいう夢告げをきっかけとするかも知れないが、生まれ変わりを可能にするエネルギーはどこから得るのであるか。夢告げと共に、それに値する何かギフトとして与えられているようには思えない。桜井徳太郎氏は、霊山や霊場の神聖性について以下のように論じる。

その神聖性を、ただ在所における神仏に祈願するだけでは十分に獲得することはできないと考え、みずから異郷の地に身体を運んで実感するということが必要であった。そのことはまた、日常生活の労働に明け暮れる俗世の人生において、身の安全と旺盛な生活力の持続をはかるために、神仏の超自然的な靈威を期待するだけでは十分でない。直接それを身に受け取ることによって活性化をはからねばならない。：（中略）：つまり、人々は聖なる他界に身を投ずることによって、衰え弱まった生命力を賦活し、そこから新たな活力を発揮する、そういう自然の摂理を学び取っていたのである。（二三）

夢告げや靈験のような現象としてだけでなく、初瀬に籠る行為そのものによってエネルギーを得て、「生まれ変わり」に近い変化を遂げた上で下山する、と言い換えることができるだろう。その「生まれ変わり」の感覚は、籠もったときの状態が「死」に近ければ近いほど、強烈に感じられるように思われる。徒歩で参詣することは、苦勞して功德を積むという以前に、もっと単純に、「死」に肉薄するような心身のダメージを負う、というのが重要なのではないか。本堂に至るまでの行程で多くのダメージを感じておくことで、「こもり」の空間で得るエネルギーは、さらに増幅し

て感じられるだろう。そしてそれは、「生まれ変わり」の感覚をも強くしていくものだと考えられる。

次に、極度の疲労に晒された玉鬘が、どのような形で「生まれ変わり」を経験したかを確認していきたい。椿市での玉鬘と、御堂を下りて大徳の坊にとどまる玉鬘とを比較する。

右近は、人知れず目とどめて見るに、中にうつくしげなる後手のいといたうやつれて、四月の単衣めくものに着こめたまへる髪のスきかげ、いとあたらしくめでたく見ゆ。心苦しうかなしと見たてまつる。

(玉鬘卷——一〇〇)

明けぬれば、知れる大徳の坊に下りぬ。物語心やすくとなるべし。姫君の、いたくやつれたまへる恥づかしげに思したるさま、いとめでたく見ゆ。

(玉鬘卷——一一三)

ひとつめは、御堂に上る前、椿市に逗留している場面の本文である。ふたつめは、御堂で一夜を過ごし、大徳の坊に下りてきた場面の本文である。どちらも、右近が玉鬘の様子を見ている。傍線部のように、右近は、玉鬘の「やつれ」た姿を、「めでたく見ゆ」と評している。ふたつの場面で異なっているのは、玉鬘が「やつれ」た自分の姿を「恥づかし」(二重傍線部)と感じているようなそぶりを見せているかどうかである。そもそも、椿市では玉鬘が右近の存在を意識していなかったのに対し、大徳の坊では右近の存在を認識しているという違いがある。言い換えれば、それこそが玉鬘の自意識の変化であるとも考えられるのではないか。右近の存在を、そして彼女に見つめられる自身を意識したからこそ、「やつれ」た自分の姿を、きまりが悪いと感じたのだ。右近の視線とは、玉鬘が六条院世

界にふさわしい存在かどうかを見極める、いわば審判のまなざしである。⁽¹⁾筑紫では意識しようがなかった六条院という世界と、自分自身とを、リンクさせたために、見劣りする自分を恥じたのだといえよう。

「恥」の芽生えは、内大臣の娘としての意識が、玉鬘の中で復活したことのあらわれとも考えられる。だとすれば、初瀬参詣の「こもり」によって息を吹き返したのは、流離によって風化していた都の女性としての自覚や矜持、そしてそれを実感できる「感受性」である。玉鬘が父内大臣との再会を御堂で祈願したのは間違いないだろうが、それだけで彼女の奥底に沈められた都の感覚が蘇るだろうか。もちろん、右近が「いかでかく生ひ出でたまひけむ、とおとどをうれしく思ふ」（玉鬘巻——一七）と認めるように、玉鬘は筑紫においても、乳母らによって、姫君にふさわしい教育を受けてきたと考えられる。⁽¹²⁾しかし、遠隔地で得られる感覚には限界があるだろう。自らの足で歩き、都を肌で感じた初瀬詣が、都人としての目覚め——「生まれ変わり」のきっかけであると考えたい。次節では、玉鬘の「生まれ変わり」を推し進めた要因をもう少し具体的に探るために、もう一度、御堂において玉鬘がどのような経験をしたのかを見直していく。

四、局の移動——鄙から、都へ

玉鬘の変化を辿る上で考察を加えたいのは、御堂における局の移動である。以下に本文を引用する。

いと騒がしく、人詣でこみてののしる。右近が局は、仏の右の方に近き間にしたり。この御師は、まだ深からねばにや、西の間に遠かりけるを、「右近」「なほここにおはしませ」と尋ねかはし言ひたれば、男どもをばとどめ

て、介にかうかうと言ひあはせて、こなたに移したてまつる。「右近」かくあやしき身なれど、ただ今の大殿に
なむさぶらひはべれば、かくかすかなる道にても、らうがはしきことはべらじと頼みはべる。田舎びたる人
ば、かやうのところには、よからぬ生者どもの、侮らはしうするもかたじけなきことなり」とて、物語いとせま
ほしけれど、おどろおどろしき行ひの紛れ、騒がしきにもよほされて、仏拝みたてまつる。

(玉鬘卷——一〇——一一)

当初、玉鬘一行の局は本尊から遠く離れた西の間だったが、そこから、本尊の右の方にあつた右近の局に移動して
ることが、傍線部からわかる。右近がこれまでもたびたび初瀬を参詣していることは、玉鬘の再会についての法師の
発言「たゆみなく祈り申しはべる験にこそはべれ」(玉鬘卷——一一)からも明らかであり、それゆえに、右近の局
がより良い場所に用意されていたのだろう。

局を移動してきた玉鬘に対し、右近は自身について「かくあやしき身なれど、ただ今の大殿になむさぶらひはべ
れ」(二重傍線部)と説明している。ここで源氏の存在を強調していることは、重要であろう。源氏が支配する六条
院が、現在の右近の居場所であり、彼女の属性であることを示したものと考えられる。⁽¹⁸⁾これに加えて、西の間から
の移動について、右近が豊後介に「かうかうと言ひあはせて」(玉鬘卷——一〇)と相談していることから考えると、
それぞれの局と、そこにいる人物は以下のように整理できる。

西の間

豊後介・男ども||鄙・筑紫

右近の局

右近

||都・六条院

このふたつの局の間を、玉鬘は三条を伴って移動したのである。局の移動は、規模こそ縮小しているが、筑紫から六条院の移動に重なる事象だったと考えることができる。玉鬘は、筑紫から上京したものの、初瀬参詣までの間は九条に住まっていた。九条は「昔知れりける人の残りたりける」（玉鬘卷一〇二）と説明されている通り、太宰少弐の古い知り合いの居所であり、筑紫の気配が残る場所である。「はかばかしき人の住みたるわたりにもあらず、あやしき市女、商人の中にて」（玉鬘卷一〇二）とあることから、周辺の人々と交わることもなく、玉鬘が接したのは筑紫の関係者に限られていただろう。都にいながら、鄙の気配が濃厚な場所にいたのであれば、それは本当の意味で都に触れたとはいいい難い。つまり、玉鬘は、長谷寺の御堂で右近の局に移動したことで、はじめて都人とその空間に触れたのである。

右近の局へと移動してきた三条の祈りと、それに対する右近の批判には、よりわかりやすく鄙と都の対立が表れている。三条が玉鬘の将来に「大弐の北の方」「当国の受領の北の方」（玉鬘卷一一一）を望むのに対し、右近は「いたくこそ田舎びにけれな」「御方しも、受領の妻にて品定まりておはしまさむよ」（玉鬘卷一一二）と応答している。三条の願望とは、太宰少弐一家の願望であり、玉鬘がその願いに長年浸されてきたことは想像に難くない。いつしかそれは、玉鬘自身にも浸透し、彼女の中にわずかに残る都人としての意識を風化させたのかもしれない。ところが、右近の局で右近が願うのは、受領の妻どころか、六条院への参入である。実父内大臣と玉鬘の再会を願っていた太宰少弐でさえも、さすがにそこまでは考えが及ばなかっただろう。鄙では思いつくはずもない、その大それた願いの対象となったことで、玉鬘の中の都人としての因子が疼いたのではないだろうか。そして、そこに「こもり」のエネルギーが加わり、都人としての玉鬘の再生——「生まれ変わり」が成ったのである。

試みに、初瀬詣の帰りに宇治へ立ち寄った浮舟の場合も確認したい。以下、宇治へやってきた車を下りる浮舟と、それを見る薫の場面の本文を引用する。

車は高く、下るる所はくだりたるを、この人々はやすらかに下りなしつれど、いと苦しげにややみて、ひさしく下りてゐざり入る。濃き桂に、無子と思しき細長、若苗色の小桂着たり。四尺の屏風を、この障子にそへて立てたるが上より見ゆる穴なれば残るところなし。こなたをばうしろめたげに思ひて、あなたさまに向きてぞ添ひ臥しぬる。「女房」「さも苦しげに思したりつるかな。泉川の舟渡りも、まことに、今日は、いと恐ろしくこそありつれ。この二月には、水の少なかりしかばよかりしなりけり。いでや、歩くは、東国路を思へば、いづこか恐ろしからん」など、二人して、苦しとも思ひたらず言ひゐたるに、主は昔もせでひれ臥したり。腕をさし出でたるが、まろらかにをかしげなるほども、常陸殿などいふべくは見えず、まことにあてなり。

(宿木卷―四八九―四九〇)

浮舟は徒歩での参詣ではなかったが、疲れ切っているようである(傍線部)。薫のまなざしを通した描写であるため、浮舟自身が参詣の疲労をどう感じていたかは読み取れない。その後、疲れが見えない二人の女房によって、中将の君と弁の尼の薫物の違いが話題にされ、「中将の君ニ鄙、弁の尼ニ都」という評価が示される。ここに、玉鬘巻における右近と同様の存在を探すとしたら、それは、浮舟と薫の仲立ちをする弁の尼ということになるだろう。そして弁の尼には、東国にはない、「京人はなほいとこそみやびかにいまめかしけれ」(宿木卷―四九一)と感じられるセンスがあるという。すると、浮舟が初瀬参詣の前で都人に接近したのは、下山し、宇治に到着してからということになる。

初瀬参詣は今回（四月）が初めてではなく、二月にも行われ、そこで初めて弁の尼は浮舟と対面したとされる。⁽¹⁵⁾ いずれにしても、初瀬の「こもり」のエネルギーと共に、都の人間に接近したのではない。

その後薫と弁の尼が対話する場面でも、浮舟は臥せたままであった。ようやく弁の尼に起こされた際には、「尼君を恥ぢらひて、そばみたる」（宿木巻―四九三）という行動に出ているが、前掲本文での「あなたさまに向きて」（二重傍線部）とほぼ同じ行動であり、そこに、都の雰囲気に合わせて行動を変えている様子は見出せない。変化があったなら、「そばみたる」ことによって薫に顔を見られてしまうことまで用心して、行動しただろう。むしろ、この時彼女を見てしまった薫によって「かばかり通ひきこえたらん人」（宿木巻―四八三）——大君のよく似た形代としての役割を与えられたことが、浮舟の変化を余儀なくしていくのである。薫との出会いは、参詣した初瀬の靈験によるものだと考えられるが、浮舟自身が初瀬参詣という行程を繰り返す中で、都人としての自覚が芽生えたとはいえない。浮舟の場合は、そもそもひとりで初瀬に参詣していることにも注意したい。弁の尼は浮舟の初瀬参詣について、以下のように説明している。

「弁の尼」：「……また、この月にも詣でて、今日帰たまふなめり。行き帰りの中宿には、かく睦びらるるも、ただ過ぎにし御けはひを尋ねきこゆるゆゑなんはべめる。かの母君は、さはることありて、このたびは、独りものしたまふめれば、かくおはしますとも、何かはものしはべらんとて」

（宿木巻―四九五）

傍線部を読む限り、今回以外は、実母である中將の君と共に、初瀬に籠っていたと考えていいだろう。今回の、中將

の君不在の初瀬参詣が、浮舟の中に沈められた八の宮との血のつながりを喚起したのかもしれない。ただし、それを浮舟自身が実感していないというのが、玉鬘との違いだろう。浮舟は、東屋巻に至ると、弁の尼に八の宮とのつながりを見出すようになるのだが、⁽¹⁶⁾宿木巻の段階ではそうなっていない。東屋巻で弁の尼と睦ぶ様子にしても、八の宮の娘であるという自覚や矜持が浮舟の中で復活したとは考えにくい。その一方で、薫からは、八の宮の娘としての意識を強烈に持っていた大君の形代として扱われていく。そのギャップは、浮舟が宇治を離れるひとつの要因になっただろう。浮舟の行動をさかのぼって捉え直してみると、宇治での入水未遂も、初瀬の「こもり」における「生まれ変わり」が不完全だった——あるいは、変化を自覚しなかったことが遠因であるとも考えられる。

今一度玉鬘に話を戻したい。玉鬘は、歩くことによって流離と「死」に近い感覚を得たのと同じように、局を移動し、身近に右近の存在を感じ、願いの対象となることで、はじめて、都人としての自分自身を実感したと考えられる。この局の移動を経て、前節で確認したような、「やつれ」た姿をした自分自身を、きまりが悪いと感じる意識が芽生えたのだった。その結果だけを見れば、玉鬘は右近の願望に飲み込まれたようでもある。⁽¹⁷⁾ただ、玉鬘が無防備に右近にその身をゆだね、右近の思い通りに操られたとするには、慎重でありたい。これまで確認してきた通り、初瀬参詣では、玉鬘自身が肉体を動かし、肌で感じ、その心に変化が生じている様子が見出せる。それを領導したのが、右近の願望や初瀬の霊験なのだとしても、そこに玉鬘の実感や自覚が伴っていることは重要である。右近がどんなに玉鬘を六条院風に仕立て上げようとしたとしても、玉鬘にそれを受け止める用意がなければ、右近ひとりが空回るだけで、六条院の主人である源氏を幻滅させるだけだっただろう。玉鬘が、自身の置かれている立場や、右近が求めるものを敏感に察知し、それに順応するように変化できたからこそ、六条院参入が成功したのだ。つまり、六条院参入を可能にした要因のひとつは、玉鬘の「感受性」だったと考えられるのである。

五、おわりに——「染まる」玉鬘

六条院参入後の玉鬘は、多くの求婚者たちに対応しつつ、身を処す賢い女君として評価されていく。⁽¹⁸⁾それは源氏に「この君をなん本にすべき」（藤袴巻―三四六）といわしめるほどであった。秋山虔氏は、玉鬘の身の処し方について、以下のように論じている。

しかもそうしたかれら（引用者注…求婚者たち）が、つねに光源氏の選択によって玉鬘との交渉の機会が与えられるのであってみれば、要するに彼女が、相手に即応してその態度を決定し、かつ交渉の中に新しく自他を発見してゆくというような主体的な姿勢を持つことはできない。むしろ光源氏によって要請される規範に即し、そのかぎりですうした男性たちと対応するのに意匠を凝らし演技を磨きあげるほかにはありえないのである。

（一一四）

藤本勝義氏は、そんな玉鬘を「したたかな精神力と行動力をもつ」た女君と称している。相手に即応する演技力——それはしなやかさともいえるであろうし、玉鬘の「染まりやすさ」ともいえるだろう。その傾向は、特に六条院参入後に顕著だが、本稿で確認してきた初瀬参詣にも見出すことができる。乳母や三条を含む筑紫の人々の願望に浸されていた玉鬘は、初瀬にて右近の願望に触れることで、変化した。それは右近の願望に「染まった」ということになるだろう。秋山氏が指摘する、源氏をはじめとした男君たちからの要請に合わせて対応していく様子に、通じるもので

ある。相手からの求めに応じて自らを変化させるにあたって、ただ流されるばかりでなく、彼女自身の実感や自覚が伴っていることは、前節までで述べてきた通りである。その感覚が根幹にあるからこそ、「染まりやすさ」は、玉鬘自身のしたたかさにつながっていくのではないだろうか。

玉鬘の六条院参入後、彼女が思いのほか魅力的であることを嬉しく思った源氏は、紫の上に「さる山がつの中に年経たれば、いかにいとほしげならんと侮りしを、かへりて心恥づかしきまでなむ見ゆる」（玉鬘巻―一三一）と報告している。振り返れば、紫の上は、理想の女君を求めた源氏が、二条院に引き取り、手ずから教育を施した女君であった。そして、紫の上が、源氏以外の男君にとっての求婚の対象となることはなかった。言い換えれば、紫の上は源氏のみによって「染められた」女君である。それに対して玉鬘は、さまざまな源氏の思惑に飲み込まれる以前に、右近の願いや求めを感受し、それに「染ま」った状態で六条院にやってきた。さらには、源氏以外の男君の求めに応じて、「染まる」こともできたのである。

同じく「染まる」紫の上と玉鬘だが、ふたりの間にある違いは、次第に埋めがたいものになっていく。望んだ出家もかなわず、源氏によって養育された二条院に籠もり、あくまでも源氏の手の内で亡くなっていくのが紫の上である。玉鬘はといえば、源氏の欲望や思惑を外れて、源氏を魅了しつつも、髭黒大将との結婚へと進んでいく。当然ながら、若紫巻のころの源氏と、玉鬘巻のころの源氏とは、年齢に差があり、女君に求めるものにも違いがある。そのこともまた、玉鬘の運命を左右したと考えられるのだが、稿を改めて考察したい。紫の上と玉鬘について、敢えて女君側の違いだけを言及するのであれば、源氏の支配圏に身を置きながら、源氏ひとりを感じてその影響を受けるのか、あるいは他の男君にも感化されるのかという違いは、女君のその後を左右するファクターになっていると考えられる。そうだとすれば、玉鬘の六条院参入における源氏の誤算――それもまた、初瀬で再生した玉鬘の豊かな「感受性」だ

ったのかもしれない。

〔付記〕『源氏物語』の本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）により、『源氏物語大成』（中央公論社）『源氏物語別本集成』（桜楓社）『河内本源氏物語校異集成』（風間書房）にて異同を確認した。『蜻蛉日記』の本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）により、『紫式部集』の本文引用は、『和歌文学大系』（明治書院）によった。

註

- (1) 山田利博『源氏物語』における初瀬と石山―玉鬘物語と浮舟物語をめぐって―（『国文学研究』八七号、早稲田大学国文学会、一九八五年）
- (2) 坂本共展「靈験」（『別冊国文学 源氏物語事典』学燈社、一九八九年）
- (3) 陣野英則「玉鬘と弁のおも」と「求婚譚における「心浅き」女房の重要性」（『端役で光る源氏物語』世界思想社、二〇〇九年）
- (4) 木幡かほる「平安文学に現れた物語」（『立教日本文学』第三九号、立教大学日本文学会、一九七七年）
- (5) 岡崎知子「平安朝女性の物語」（『平安朝女流作家の研究』法蔵館、一九六七年）
- (6) 原田敦子「物語の旅」（『王朝文学と交通』竹林舎、二〇〇九年）
- (7) 『新編日本古典文学全集』頭注（二一八―一八）
- (8) 前掲注（5）岡崎氏論文と同じ。
- (9) 西郷信綱「長谷寺の夢」（『古代人と夢』平凡社、一九七五年）
- (10) 桜井徳太郎「聖地と他界観」（『仏教民俗大系3 聖地と他界観』名著出版、一九八七年）
- (11) 三田村雅子「召人のまなざしから」（『源氏物語 感覚の論理』有精堂出版、一九九六年）では、「やがて訪れた機会に玉鬘その人を観察し、その美しさや気品、教養の程度を逐一確認する右近の視線には、この田舎育ちの姫君が六条院という晴がま

しい世界に入っていくことが許されるか否かを厳しく吟味する色あいがある」と指摘されており、またそこには一種の「冷ややかさ」があるとされている。

- (12) 原岡文子「玉鬘考」交換・交通・流離をめぐって」(『源氏物語とその展開』竹林舎、二〇一四年)では、筑紫という交易の中心地を流離する玉鬘に注目し、「筑紫をさすらう玉鬘は、その地の文物に触れることで確かに六条院にふさわしい姫君としての在り方を育んだのだ」との指摘があり、首肯できる。本稿では、都人と直に接し、文物では得られない実感を得たであろう瞬間を重視した。

- (13) 前掲注(11)三田村氏論文に指摘があるように、右近は紫の上付きの女房でありながら、夕顔の代わりも務める召人でもあった。その意味でも、右近の身には、六条院世界の気配や価値観が、濃く刻まれていたと考えてよいだろう。

- (14) 同様の指摘が、注(1)山田氏論文にもある。

- (15) 弁の尼の「この二月になん、初瀬詣のたよりにはじめて対面してはべりし」(宿木巻一四九五)という発言からわかる。

- (16) 三条の小屋を訪れた弁の尼に対し、浮舟は「昔語もしつべき人の来たれば、うれしくて呼び入れたまひて、親と聞こえける人の御あたりの人と思ふに、睡ましきなるべし」(東屋巻一八九)と感じている。

- (17) 木谷真理子「初瀬」(『源氏物語研究集成第十巻 源氏物語の自然と風土』風間書房、二〇〇二年)では、「右近との再会以後、その田舎者ぶりを強調されるようになる乳母たちは、六条院の美々しさに圧倒され、右近の、玉鬘を六条院へという願いに丸め込まれてしまうのである」と論じられている。本稿では、玉鬘自身も、右近の願いに飲み込まれていくと考えた。

- (18) 原岡文子「『源氏物語』の流離—玉鬘物語を中心に—」(『王朝文学と交通』竹林舎、二〇〇九年)では、「さまざまの意味で流離し、交通の中心、要に生きた玉鬘は、「もの」として流通を身に負いながらもいかにも賢く身を処し、光源氏その人からも巧みに身を翻し、ある距離を保ち続けた。その賢さが、流離を経て結果的にその人の幸福を導く、という物語の枠組みが見えてこよう」とする。本稿では、その賢さは、彼女の感覚に根差したものではないかと考えた。

- (19) 秋山虔「玉鬘をめぐって」(『源氏物語の世界』東京大学出版会、一九八四年)

- (20) 藤本勝義「ゆかり」超越の女君—玉鬘」(『人物で読む『源氏物語』第十三巻—玉鬘』勉誠出版、二〇〇六年)